

## 篠〈ささ〉が峰〈みね〉の鬼〈おに〉（山南町・春日町）

丹波〈たんば〉と播磨〈はりま〉の国ざかいにそびえる篠が峰に、ずっと昔、鬼がすんでいました。ながいあいだ、身心をきたえたので、空とぶことや、千里の遠くを見ることや、千人力をもつことが、できましたが、ちえが、人よりもおとっていることを、きにしていました。年をとって、自分にあたえられた二千年の命も、あと、数年になってきました。「人のために、はたらいておけば、天国にいける。」と、きてからは、人助けのために、大空をかけまわっていました。

ある夕方、つかれて帰ってくると、篠が峰は、あらしにおそわれていました。鬼は、山のてっぺんの大岩の上に、どっかり、あぐらをかいて、きもちよく雨にうたれながら、はるか南の山すその牧山の里（山南町和田西部）をながめていました。「おやおや、里人がさわいでいるぞ、どうしたのかな。」と、かがみこんで見ると、カザシ滝から、水があふれでて、牧山の里は水びたしになっているのです。里人たちは、石をかかえてきては、水をせきとめようと、あせりますが、水のいきおいで、石はながされています。「うん、よし、よし、たすけてやるぞ。」

鬼は、すぐ、カザシ滝へおりていって、滝つぼに、口をあてて、ぐっと地下へふきこみました。すると、みるみる、滝つぼの水は、地下深くおちこんで、水は一しずくもなくなりました。この水が、地下をとって、東の方遠く、船城の里へ、ふきでて、里が水びたしの沼になったことは、さすがの鬼も、しりませんでした。おかげで、牧山の里は、大水から、すくわれたのですが、その後、日照りがつづくくと、牧山の草はかれはて、畑の作物は、みのらなくなっていました。それでも、里人たちは、ちえをしぼりました。井戸を深くほって、地下の水をさがしはじめました。また、水がすくなくても、よく育つ栗や桑をうえはじめました。

ある日、牧山の里に帰ってきた鬼は、里人が苦勞しているのにきづきました。「よし、よし、井戸をほってやるぞ。」と、手の指で、土を一かきして、地下水をみつけてくれました。「うん、栗や桑も、どっさり、うえてやるぞ。」と、一夜のうちに、牧山の里ばかりでなく、遠く小川の里、久下の里まで、びっしりと、栗林、桑畑にしてくれました。「おいしい栗がなりだして、うれしいが、よいマユをつくるカイコが見つからないので・・・。」といいながらも、里人たちは、げんきをだして、くらしはじめたので、鬼もよろこんでいました。

ある日のこと、篠が峰から、東の空へとびだした鬼は、船城の里が、沼になっているのを見て、おどろきました。その船城の里人たちも、ちえをしぼっていました。山から、木をきりだしては、沼にうずめて、田づくりをしていました。「そうか、そうか、木をうずめて、足がしずまないようにしたら、田づくりができるのだな。さあて、どこの木をあつめようかな。そうだ、牧山の里の栗の木をまびいてやろう。」ひきかえした鬼は、牧山の里の栗をまびいては、遠く船城の沼へなげこみました。みるみる、田づくりのできた船城の里人たちは、だきあってよろこびました。いよいよ、二千年の命もつきようとした鬼は、天国からよびだしがまいました。鬼は、よろこんで篠が峰をとびだしました。

「そうだ、牧山の里に、よいカイコをつくってやらなくちゃ。」と鬼は、大空にうかんでいる白雲を、ちぎっては、まるめて牧山の桑畑におとしていきました。その雲は、きれいな繭〈まゆ〉になり、蛾〈が〉がでて卵をうみ、カイコがうまれたので、里人はよろこびました。その後、牧山の里は、栗と繭の産地として有名になりました。鬼は、船城の里人が、田で働いているを見て、いつものくせがでました。「これが、さいごだ。このへそをおとしてやろう。」と、自分のへそをとって、田におとしました。おへそは、田の水にもぐると、クルクルクルリとまわって、大きなタニシとなりました。その後、このタニシは、船城の特産となり、多くの人々をよろこばせました。天国にのぼった鬼は、どうしているでしょう。きっと、篠が峰や、牧山、船城の里人のことを、思いだしているにちがいありません。

